令和７年度全国医師会勤務医部会連絡協議会

理事　仲村　尚司

去る、11月８日（土）ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイングにて開催された標記協議会について報告する。

開会宣言

岩手県医師会の祖父江憲治副会長より開会が宣言された。

挨拶

日本医師会の松本吉郎会長より主催者挨拶が述べられた後、担当県である岩手県医師会の本間博会長より挨拶が述べられた。

来賓祝辞

釜萢敏参議院議員、岩手県の達増拓也知事（代読：八重樫幸治副知事）並びに、盛岡市の内館茂市長より来賓祝辞が述べられた。

特別講演Ⅰ

「日本医師会における勤務医支援に向けた取り組み」　日本医師会長　松本　吉郎

高市新総理のもとで国会が始まった。前国会で唯一成立しなかった“医療法の改正案”が、今期の大きな焦点の一つになる見通しである。引き続きしっかりと議論に臨んでいく。

主要な政策課題として政府が掲げる“11万床の病床削減”や“薬剤給付の保険適用除外”については、これまで述べてきたように、地域で必要な病床は確実に残すべきであり、薬を保険給付から外すという方針は筋が良いとは言えない。日本医師会として、この基本的な考え方は今後も一貫して主張していく。各都道府県医師会においても、ぜひ地元国会議員にしっかりと伝えていただきたい。

勤務医支援については、“経営改善”“診療報酬”“勤務医のあり方”といった医療の根幹に関わる課題に真正面から取り組む。勤務環境の

改善や医学部定員の問題等も、勤務医にとって重要なメリットにつながると考えている。“働き方改革”や“開業医と勤務医の役割分担”の見直しも、引き続き推進していく。

また、医療機関の経営危機や診療報酬改定については、現在も厳しい状況が続いている。財務省の姿勢は依然として厳しいが、必要な医療を守るため、強い姿勢で対抗していく。

最後に、日本医師会は勤務医と一体となり、意見を丁寧に聴取しながら活動を進めていく組織であることを改めて強調したい。開業医か勤務医かという立場の違いを超え、すべての医師と関わりながら、医療の責務を果たしていく。

特別講演Ⅱ

「南部美人の挑戦-混沌とした時代を切り開く-」
株式会社南部美人　五代目蔵元
代表取締役社長　久慈　浩介

南部美人は1902年創業で、「品質一筋」を家訓とし手造りを守り続けてきた。また、二戸市は全国生産の七割を占める漆の産地で、日光東照宮や金閣寺の修繕にも用いられる高品質な漆を生み出している。

国内外の酒類コンテストで高い評価を受け、現在は66か国に輸出している。また、2013年にコーシャ認証、2019年に世界初の完全ヴィーガン認証を取得し、新たな価値づくりにも取り組んでいる。コロナ禍では消毒用アルコール製造の免許を活用してクラフトジンやウォッカの製造を開始し、さらに岩手県初の蒸留所を設立してクラフトウイスキーづくりにも着手している。

日本酒の消費量が最盛期の1/4まで減少する中、3つの主要な挑戦をした。まず、瓶内二次発酵で造るスパークリング日本酒「awa酒」の開発である。砂糖添加を一切行わず「世界で最もピュアなスパークリング」を目指し、世界の乾杯文化への浸透を図った。次に、生酒の劣化を防ぐ「スーパーフローズン」技術の開発で、マイナス30度で瞬間冷凍することで味や香りを完全に保持し、最高状態のまま世界へ届けることを可能にした。最後に、砂糖や甘味料を使わない糖類無添加梅酒の開発で、麹を100%使う独自製法により自然な甘みと低カロリーを実現し、特許も取得した。

また、国内人口の減少を見据え30年前から海外市場の開拓に取り組み、航空会社や新幹線のグランクラスでの採用、国連での試飲会開催など、国際的な評価を高めてきた。遠隔地のイースター島やアフリカにも販路を広げ、地方の小規模企業でも独自価値があれば世界で戦える。

報告

「日本医師会勤務医委員会報告」
日本医師会勤務医委員会委員長　一宮　仁

今年度の委員会の主な活動として、(1) 会長諮問事項の検討・答申、(2) 全国医師会勤務医部会連絡協議会への意見具申、(3) 都道府県医師会勤務医担当理事連絡協議会の企画・立案、(4) 日医ニュース「勤務医のページ」の企画・立案、(5) その他勤務医に関わる諸問題の検討を行っている。

特に (1) については、今期の会長諮問である「勤務医の医師会活動への更なる参画」に対し、前期の会長諮問（医師会組織強化と勤務医）を踏まえながら、組織率の維持、医師の働き方改革をはじめとする医療政策課題への取り組み等、勤務医がこれまで以上に医師会活動へ参画するための具体策を現在検討している。

結びとして、現在の医療機関や管理者層が直面している危機的状況は、病院管理者や勤務医が、地元医師会や日本医師会を「頼りになる政策提言ができる組織」であると再認識する契機になり得る。そのうえで、勤務医の参画を促進するためにも、医師会活動の意義を所属医師会の中でもしっかり伝えていただきたい。

次期担当県挨拶

次期担当県（大分県医師会）の河野幸治大分県医師会長より、次年度は令和8年11月7日（土）ホテル日航大分オアシスタワーにて開催を予定している旨挨拶があった。

特別講演Ⅲ

「新型コロナウイルス感染症と今後の日本の医療」

国際医療福祉大学　学長　鈴木康裕

過去20年間で、コロナだけでなくSARSやMERSを含めて5回のパンデミックが世界を襲った。今後20年間でも同じような危機は必ず起こると考え、私たちは準備をしておく必要がある。感染症は非常に速く広がり、病床を急に空けろと言われても、既に入院している患者がいるため対応は簡単ではない。医療提供体制はもともとギリギリで運営されており、特にICUや救急の現場はあっという間に逼迫した。医療従事者も差別や偏見にさらされ、精神的にも肉体的にも限界に達する事例が相次いだ。自分の子ども達が保育所に入れない、病院の駐車場で寝泊まりする等の現実を目の当たりにした。

また、日本の高齢化と家庭環境の変化も深刻である。生産年齢人口は減り、介護を担う家族は減少している。病院や介護施設は負担が増え、医療財政も圧迫している。特に、急性期病院ではCTやMRIを購入しても消費税が負担となり、経営が苦しくなる現状がある。それでも日本の医療の質は非常に高く、たとえば大腸がんの5年生存率はアメリカより圧倒的に高く、費用はその1/5程度である。ただし、外来受診回数が多く、病床稼働率は低下し、急性期病院の赤字経営も続いているのが現実である。

オンライン診療は広がったが、医療機関間や行政とのデータ共有は不十分で、法的な制約もある。AIを活用すれば診断精度は向上し、医師の労働も軽減できるが、情報共有を進めるには制度面の整備が不可欠である。

これからの医療は、平時から病床や人材、物資を確保する強靭な体制を作ること、医療機関間の連携と在宅医療を含めた地域医療の充実、AIやIoTなどを活用した医療DXの推進、そして安定した財源と医療従事者の働きやすい環境の整備が必要である。医療の重点をどこに置くのか、国内外でどのように資源を活用するのかも真剣に考えなければならない。コロナの経験を経て、私たちは医療の脆弱性を正面から見つめ、未来に向けた確かな方向性を築く必要がある。

シンポジウム

「人口減少時代に活躍する勤務医」

①「岩手の臨床研修医教育（いわてイーハトーヴ臨床研修病院群の取り組み）」

岩手医科大学医学部総合診療医学講座

講師　米田　信也

人口減少時代に活躍できる医師を育てていくという観点から、地域や経営母体の垣根を超え、いわゆる“オール岩手”で取り組む研修プログラムが重要である。

具体的には、互いに支え合う助け合い研修の実施、県内の研修医全員を対象とした合同オリエンテーションや各種セミナーの開催、指導医の育成、そして研修医のメンタルヘルスケアと、研修医同士・指導医との繋がりの確保が極めて重要である。

こうした共同の取り組みを継続してきた結果、研修中断率が低下し、県内での定着率も高い水準を維持できているという成果が確認できている。

②「目標伝達、勤務環境整備、総合的に診る教育とチーム医療、地域活動で、医師の活躍を支える」

あがの市民病院　病院長　藤森　勝也

医師の活躍を支えるためには多角的なアプローチが不可欠である。病院の運営目標を全員で共有し、勤務環境を整え、多職種との連携をさらに推進することで、医師の負担を確実に軽減していく必要がある。

また、総合的な視点を持った教育を通じて研修医を育成し、地域活動に積極的に参加してもらうことによって、住民の健康増進に寄与するとともに、病院への愛着を育むことができている。こうした取り組みの積み重ねが、地域包括ケアの実現に確実に貢献している。

③「医療 DX- 地域医療連携システムの経験」
東北大学大学院医学系研究科医学情報学分野
教授　中山　雅晴

日本の医療が直面している人口減少や高齢化、そして地域医療格差といった課題には、医療 DX の活用が必要不可欠である。我が国は電子カルテや電子処方箋の普及率が国際的に見ても依然として低い水準である。

さらに、災害時における医療情報の共有が極めて重要であり、診療報酬 DX によって業務効率化が十分に期待できる。そのなかでも特に、現場での業務効率化に直結する一次利用が重要である。今後の医療 DX 推進にあたっては、コスト、セキュリティ、そして組織としてのリーダーシップが極めて重要な課題になる。

④「憧れるのをやめましょう～混沌の先に居場所があった～」
岩手県立中央病院総合診療科
医師　住吉　明子

一人の女性医師として地域でキャリアを継続できた理由として、三つの要因が大きかった。第一に岩手県の医療支援制度の存在、第二に自分を必要としてくれるポジションが確かにあったこと、そして第三に風通しの良い職場環境が整っていたことである。

また、こうした経験を踏まえ、柔軟な働き方は女性医師に限らず、すべての医師の確保にとって重要な鍵であるとの認識を示した。医師が安心して働き続けられる環境を実現するためには、社会全体の意識改革と制度の整備が不可欠である。

⑤「人口減少を迎える地域で」
岩手県立釜石病院　院長　坂下　伸夫

現役世代の減少と高齢者の増加という全国的な傾向が岩手県では先行して進んでおり、これによって医療従事者の確保が困難になり、病院経営の悪化や地域医療の縮小、さらには消滅の可能性すら生じている。

解決策の一つとして医療の集約化が議論されているが、それによって医療アクセス性の悪化、医療従事者の負担増、特定診療科の縮小・消滅等のデメリットが生じる。加えて、地域に根差した病院が果たす経済的側面、社会的側面、文化的側面の重要性を示す必要がある。

その後、全シンポジストが登壇し、質疑応答やディスカッションが行われた。

「いわて宣言」採択

最後に、宮田剛岩手県医師会常任理事・岩手県医師会勤務医部会長より「いわて宣言」が読み上げられ、満場一致で採択された後、閉会した。

閉会

小泉嘉明岩手県医師会副会長より閉会が宣言された。

令和７年度全国医師会勤務医部会連絡協議会
プログラム

日　　時：令和７年11月８日（土）10：00～
会　　場：ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング
　　４階　メトロポリタンホール
主　　催：公益社団法人　日本医師会
担　　当：一般社団法人　岩手県医師会
総合司会：岩手県医師会　常任理事　伊藤 智範

メインテーマ　『勤務医が生き生きと活躍できる場を作る　～混沌を成長の機会に～』

【日　程】

開　　会
開　　会　　岩手県医師会副会長　租父江憲治
挨　　拶　　日本医師会会長　松本　吉郎
　　岩手県医師会会長　本間　　博
来賓祝辞　　岩手県知事　達増　拓也
　　盛岡市長　内舘　　茂

特別講演Ⅰ
「日本医師会における勤務医支援に向けた取り組み」
　　日本医師会会長　松本　吉郎
　　座長：岩手県医師会会長　本間　　博

特別講演Ⅱ
「南部美人の挑戦 - 混沌とした時代を切り開く -」
　　株式会社南部美人　五代目蔵元
　　代表取締役社長　久慈　浩介
　　座長：岩手県医師会副会長　小泉　嘉明

報　　告
「日本医師会勤務医委員会報告」
　　日本医師会勤務医委員会委員長　一宮　　仁

次期担当県挨拶　　大分県医師会会長　河野　幸治

特別講演Ⅲ
「新型コロナウイルス感染症と今後の日本の医療」
　　国際医療福祉大学学長　鈴木　康裕
　座長：岩手県医師会参与・
　　岩手県医師会勤務医部会常任幹事　望月　　泉
　　岩手県医師会勤務医部会副部会長　久保　直彦

シンポジウム「人口減少時代に活躍する勤務医」
　座長：岩手県医師会勤務医部会副部会長　伊藤　達朗
　　岩手県医師会勤務医部会常任幹事　吉田　　徹

①研修医教育：
「岩手の臨床研修医教育（いわてイーハトーヴ臨床研修病院群の取り組み）」
いわてイーハトーヴ臨床研修病院群 WG 代表・
　岩手医科大学医学部総合診療医学講座講師　米田　真也

②総合診療：
「目標伝達、勤務環境整備、総合的に診る教育とチーム医療、地域活動で、医師の活躍を支える」
　　あがの市民病院病院長　藤森　勝也
③医療 DX：
「医療 DX- 地域医療連携システムの経験」
東北大学大学院医学系研究科医学情報学分野
　　教授　中山　雅晴
④女性医：
「憧れるのをやめましょう
　～混沌の先に居場所があった～」
　　岩手県立中央病院総合診療科　住吉　明子
⑤岩手県：
「人口減少を迎える地域で」
　　岩手県立病院院長会会長・
　　岩手県立釜石病院院長　坂下　伸夫

全体ディスカッション
　座長：岩手県医師会常任理事・
　　岩手県医師会勤務医部会部会長　　宮田　　剛
　　岩手県医師会常任理事・
　　岩手県医師会勤務医部会副部会長　伊藤　智範

いわて宣言採択
　　岩手県医師会常任理事・
　　岩手県医師会勤務医部会部会長　宮田　　剛

閉　　会　　岩手県医師会副会長　小泉　嘉明
懇 親 会